

---

# 地獄谷

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地獄谷

### 【Nコード】

N9181T

### 【作者名】

猫目石

### 【あらすじ】

地獄谷という温泉に殺生丸はりんを連れてきた。

雪・・・音も無く後から後から降り頻る雪の中、奇妙な一行が空を飛んでいる。

片や、双頭の竜に跨る珍妙な格好の小妖怪、その後ろには、十代の前半と思しき人間の少年、もう片方は、純白の雪に溶け込みそうな白い毛皮に童女を包み、懷に抱き込んだ美貌の青年。

白銀の髪、白絹の着物、白い肌、そのまま雪の精と云っても通りそうな犬妖の殺生丸が率いる一行は、この悪天候の中、何処へ向かうとしているのか。

時折、吹き付ける風は身を切るように冷たく妖怪の端くれである邪見でさえ身体を震わせる程である。

況して、人間である琥珀には尚更の事、寒さに耐えかねてガチガチと歯を鳴らしている。

全く平気なのは犬妖である殺生丸と彼の毛皮に包まれ懐深く大切に抱き込まれた幼い人間の少女、りん位な物であろうか。

殺生丸が犬妖特有の恐ろしく鋭い嗅覚を誇る鼻腔で風の中に目当ての場所の匂いを捉えた。

一気に速度を上げ急降下する。

邪見も遅れてはならじ！と阿吽の手綱を引き絞り、急いで主の後を追う。

殺生丸が何かに気付いたのか後方の邪見に、声を掛けて注意を促す。

「邪見、阿吽の方向を変えろ！」

「へっ！」

従者が間抜けな返答を返すか返さないかの内に、下から熱湯が勢い良く噴出してきた。

ビシュ——ッ！

温度にすれば五十度から九十度は、あるだろうか。

「ドワァ~~~~~~~~ッ！！！」

慌てて阿吽の手綱を引き方向を変える邪見。

もし、あの熱湯をともに被<sup>かぶ</sup>つていれば、まず火傷は免<sup>まぬ</sup>れない処であつた。

「おつ、驚いたあ~~~~！ 肝が冷えたわいつ！」

「危ない処でしたね、邪見様。あれは何だったんですか？」

緑色の小妖怪の後ろに控えた琥珀が、先程の不思議な現象について邪見に尋ねる。

「あれはな、間欠泉といって、一定の時間毎に、ああやって熱湯を噴出すのじゃ」

「俺、温泉は知ってたけど、あんなのは初めて見ました」

「どの温泉にでも起きるといふ訳ではない。極めて珍しい現象なのじゃ」

邪見が長年の見聞で集めた知識の一端を得意気に披露する。  
こう見えて、邪見は中々の物知りで世間一般の素養は一通り身に付けているし、その上、長年の旅暮らしで見たり聞いたりした事も多い。

謂わば妖怪版“耳袋”の語り手と言っても良いかも知れない。

目的の場所に近づくに従い邪見でも嗅ぎ分けられる程度に温泉の匂いが強くなってきた。

其処そこかしこ彼処に湯煙が白く立ち昇っている。

切り付けるように冷たい冬の冷氣が地熱と温泉の蒸気で温められ和やわらぎ始めている。

乳白色の豊富な湯量が滔々（とうとう）と川に流れ込み冷水を温水にと変えている。

冷厳な冬に対抗するかのように温泉の蒸気が周囲一帯を覆い冷氣を温め、この場所だけは春を思わせるような気温に変化させている。

此处、信濃国しなののくにの“地獄谷”は古くから熱湯が噴出す間欠泉が地獄の“釜茹での刑”を連想させるのか長く“地獄の地”として恐れられてきた。

地名も其れに由来している。

この地から湧き出す温泉は『万病に効く』と云われ皮膚病に対する効能も高い。

わざわざ遙か遠くから湯治とうじに訪れる人が絶えない程である。

しかし人里から遠く離れ冬ともなれば完全に雪に覆われ、おいそれとは近づく事さえ出来なくなる場所にある。

その為、この“地獄谷”の湯治場とうじばは雪に閉ざされる期間は必然的に閉めざるを得ないのであった。

尤も、殺生丸一行にとっては、それこそが願ったり叶ったりの場所である所以ゆえんなのだが。

殺生丸自身は全く人気の無い遙か山奥の秘湯に逗留とちゅうする事も一考してみたのだが、そうすると、りん達が雨露しづを凌ぐ家屋が無い。

そうした理由から冬季のみ閉鎖される、この湯治場が選ばれたのであった。

暫くすると深い雪の中に湯治場の建物が見えてきた。

春のような暖かい蒸気に満ちた大気が冷気に曝さらされ続けた邪見と琥珀の心と身体を知らず知らずホツと解ほくしてくれる。

阿咩もこの温かさが嬉しいのか、グルグルグルウ~~~~と喉を鳴らす。

りんが、はしゃいで殺生丸の懷ふしから飛び出す。

「ウワ~~~~ッ！温かい！気持ち良い~~~~！」

「まるで春みたい。殺生丸さまっ、ここに連れて来てくれて有り難う！」

ひとまず一行は建物の中に身を落ち着けた。

流石に湯治場だけあって一通り炊事道具が揃っている。

その上、大勢が寝泊りする場所でもあるので寝具までもが何人分も置いてある。

これならば、冬の間、此処ここに留とどまったとしても不自由しないだろう。厳しい寒さに、りんの小さな手足は霜焼けと皸あかぎれになり、痛々しい様相を呈している。

少なくとも、りんの手足の霜焼けと皸あかぎれが完全に治るまでは此処に腰を落ち着ける事を殺生丸は決めた。

天空の母の城を辞して以来、殺生丸は、りんの健康に、一方ひとかたならぬ関心を払うようになっていた。

間違はなく冥界での経験に起因している。

最早、天生牙でも、冥道石でさえも、りんの命を？ぐ事は出来ないというどうしようもない事実。

もし、万が一、りんの身に何かあったら・・・次こそは最後。そうさせない為には童女を護るしかなかった。

あらゆる危険を未然に察知し排除し殺生丸自身が、頑是無がんぜない童女を護り切るしかなかった。

何故なら・・・殺生丸にとって、童女は、りんは、何よりも大切な

存在になつていたから。

思い返す度に今も甦る、あの激しい喪失感と苦痛。

何処までも昏い冥界の中、隻腕で息絶えた童女を抱きかかえた時、殺生丸は真の恐怖を味わった。

童女が“愛しい”とさえ自覚していなかった己が心。

そんな感情が己の中に在る事さえ知らなかった。

何の力も持たない無力極まりない存在の童女、己がその気になりさえすれば一瞬の内にこの爪で切り裂いてしまえるような儚い命。

事実、りんは嘗て妖狼族の狼どもに噛み殺され、あつけない程、簡単に命を落とした事がある。

その命を、天生牙を振るつて冥府から呼び戻したのは・・・己自身。何故、あのような事をしたのか？

童女の眩しい笑顔が失われる事が許せなかったのかも知れない。数百年、生きてきて初めて見た、何一つ他意の無い純粹な笑顔。

あの時、既に、己は童女の笑顔に心惹かれていたのかも知れない。だからこそ蘇生した童女を旅の供に加え連れ歩いて来たのだろうか。

鉄砕牙を使いこなした犬夜叉の放った風の傷を受け身動きすらままならぬ深手を負った己に臆する事なく近付いてきた稀有な存在。

媚びもせず諂いもせず何の見返りも求めず・・・。

これまでも己に近付いてきた輩は居た。

だが、そいつらは己の力を利用してようと阿る奴らばかりだった。

神楽——そう言えば、あの女もそうだったな。

奈落から自由になりたいが為に己の力に目を付けて近付いてきた。

奈落とて同じ事。

己が最も嫌う唾棄すべき者ども。

阿諛追従しかしない不誠実極まりない輩達。

そんな浅ましい性根の者達を見慣れた己には、りんの存在は“不思議”としか云い様の無い物で。

見極めたかったのかも知れない、童女の真意を。

何故、手負いの獣そのままの己を救おうとしたのか？

其処に何らかの作意が在ったのではないかと。

猜疑心に満ちた己の心は此処でも見事に肩透しを喰った。

元々、何も無い処に、そんな物が存在する筈も無く、天真爛漫な童女は、日々、無邪気に花を摘み愛らしい声で小鳥が囀るように話しかけて来た。

りんから己に向けられる感情は日溜まりのように暖かく柔らかな心地良い物で何時しか“りん”は己に取って何者にも代え難い存在へと変わっていった。

喪う事など、到底、想像さえ出来ない程に。

(りん・・・お前は何時の間にこんなにも私の心を捉えたのだ?)

物思いに耽る殺生丸を騒々しい物音が現実<sup>ふけ</sup>に引き戻した。

どうやら、りと邪見が何やら言い争っているらしい。

聡い妖耳<sup>さこ</sup>で聞き耳を立ててみる。

「どうして、みんな一緒に温泉に入っちゃいけないの？ 邪見さま」

「馬鹿者っ！『男女、七歳にして席を同じゅうせず』という諺があるのじゃっ！」

「りんは七歳じゃないもん！」

「お前は、違うじやろうが琥珀はとうに七歳を超しておるし儂にしても同じ事じゃ」

「つまんないの。じゃあ、殺生丸さまと一緒に入るのは良いのかな？」

「阿呆っ！もつと悪いわいっ！お前は、儂の説明をチャンと聞いて

「おったのか!？」

邪見がそう云った舌の根も乾かない内に従者の小さな身体は遙か彼方の宙を舞っていた。

殺生丸に思いつき蹴り飛ばされたのだ。

余計な事を云うな、馬鹿者!!

折角、りんが、一緒に入ろうと言っている物を! フン、気の利かない奴だ。

「アレエ~~~~邪見さま、飛んでっちゃった。大丈夫かな? 雪の中に埋まっちゃわないかな?」

「その内、戻ってくる。それよりも・・・りん、私と一緒に温泉に入りたいのか?」

「うんっ!」

「・・・そうか・・・」

「琥珀も一緒に入ろう! 人数が多い方が、きっと楽しいよっ!」

「えっ!？」

りんが、そう云った途端、殺生丸が琥珀をギロツと琥珀を睨みつけた。

それも、りんの立っている位置からは絶対に見えない角度で。

(貴様、まさか、りんと一緒に入ろうなどと考えてはおるまいな?)

殺意の籠<sup>こも</sup>った無言の恫喝を漂<sup>い</sup>わせて射<sup>い</sup>竦<sup>すく</sup>めるように金色の獣眼が光る。

（こっ、怖い！ しっ、真剣に怖いよおおおおおおおお！）

全身に冷や汗を浮かべながら、しどろもどろで琥珀がりんの誘いを断ったのは云うまでも無い。

「いつ、いいよ。おっ、俺は後で邪見様と一緒に入るからっ！」

「ふゝゝん、そうなの。」

こうして殺生丸は首尾よく溺愛する童女と一緒に温泉に浸<sup>ひ</sup>かったのであった。

雪に覆われ一面、白一色に変わった風景の中、空から舞い降りる雪を眺めつつ入る温泉は湯煙情緒満載で風流の極みとも云うべき眺めであった。

これで酒でもあれば文句無しなのだが。

生憎、用事を言付けようにも邪見は、さっき、蹴り飛ばしたばかりで、まだ戻って来ていない。

まあいい、暫し、可愛いりんと一緒に温泉を楽しむとするか。

りんは先程から湯に潜<sup>ひそ</sup>ったり出たりを飽きもせず繰り返して遊んでいる。

ようやく飽きたらしい。

私の傍に寄って空を見上げている。

「静かだね、殺生丸さま。まるで、ちゃんと殺生丸さましかこの世に居ないみたい」

「もし、そうだとしたら・・・嫌なのか？」

「えっ！ ううん、りんは、それでも良いけど、殺生丸さまは嫌じゃないかな？と思って」

「・・・そんな事はない。（お前さえ、私の側に居れば良い）」

雪が音を吸収するのだろう。

聞こえてくるのは、唯、コポコポと湧き出す温泉の湯の音のみ。静かで平和な世界である。

“地獄谷”などという怖ろしげな地名からは想像もつかないような安らかな癒しの空間。

まるで神がこの地に宿り給うたかのような清浄な美しさが雪によってもたらされている。

りんの眼では判らないだろうが殺生丸の妖視にはかなり遠くで同じように温泉に浸かっている獣達の姿が見えた。

猿は集団で、狐は一匹で、更に遠く離れた場所には鹿の親子がそれぞれに暖を取る為か、又は、傷を癒す為か、心地良さに首までುತ್ತたりと浸かり目を細めている。

（雪の降る間は人間達も近づけぬ。獣どもの湯治場に早変わりという訳か）

（フツ、そう云えば・・・私も犬妖、獣である事に違いは無いな）

殺生丸は妖視に映る獣達を眺めながら、ふと、そんな思いを抱いた。太陽が雪雲で覆い隠されているせいで時間の経過が掴みにくい。夕暮れが近付いていたようだ。

急に辺りが暗くなってきた。

それと同時に雪も漸く止み星が見えてきた。

風で雪雲が飛ばされたのだろう。

冴え冴えとした空に浮かぶのは冬の半月、上弦の月だ。

これから次第に膨らみ満月へと近付いてゆく。

りんに対する殺生丸の想いも今はまだ庇護する者への保護者としての情が大半を占めている。

しかし、その想いも月が満ちていくように、りんが成長するに従い変化の度合いを高めていくのだろう。

雪が融けて水に変わるようにそれは必然で、そんなに遠い未来の事ではない。

了

2006・12/17（日）作成 猫目石

《

（後書き）

《第二十四作目『地獄谷』についてのコメント》

とにかくトラブルで難儀した作品です。

日記に書いたように二度目の消去経験作品でサックリ綺麗さっぱり消してしまった物です。

一度めのように大長編でなかったのが、せめてもの幸いでした。

当初の題は『湯煙道中』でしたが、こんなトラブルを経験すると験を担ぐ気分になってきて『地獄谷』と改題しました。

実際、『湯煙道中』よりも『地獄谷』の方がインパクトがあって強烈。

これは良いとばかりに悦に入ってます。

ご訪問 有り難う御座いました。

2006・12/17（日）

猫目石

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9181t/>

---

地獄谷

2011年7月9日04時46分発行